為學玉篇 上

和書門 類
二七七八一 號
八八 函
一〇 架
三 冊

内閣文庫
和書 類
二七七八一 號
三 冊
九〇 函
一二 架
268

内閣文庫
番號 和 27781
冊數 3（1）
函號 190 268

190-268

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite
MSCCPPCC0817
MSCCPPPE0817
国立公文書館
National Archives of Japan

為學玉箒序

先大人堵庵先生平日答于門人来問道術者自旁記之積為若干卷頃日斧正揚特就其中採摘適要於心學而深切于道術者輯收以為三卷名曰為學玉箒其意蓋取掃除塵埃之義也夫人熟讀此編日掃除身心之穢垢塵埃則日新之功可見君子

明治十三年購求

国立公文書館 National Archives of Japan

之域可窺然則為玉箒不亦誣乎此編記以國字者欲令寒郷僻邑鄙夫野人目未視典籍耳未聞聖教者易通曉而已豈敢望博洽君子乎是為序

寛政紀元己酉秋九月庚子

男手島建謹撰

爲學玉箒巻上

目録　凡八條

一　阿ら玉の巻　初丁オ

一　克己復礼　二丁ウ

一　念々の起る根　四丁オ

一　亡親への孝行　七丁オ

一　致知格物　十一丁オ

一　曽子の母指をかむ　十二丁ウ

一　主忠信　二十丁オ

爲學玉箒巻之上

手島信著　男上河正揚輯

[library seal]

○或問、年始といふ事ハ、いかなる義にや。

答。あら玉の年とて、あら玉ハ去年さりまくこともあるにあら
たまるといふにあらず。その生れたる玉徳をあらく
備りし義なり。たゞ年ハ来り去りし。故に年始とあら
たまるとて喜び祝ふ事り。然ハ即人の本心の知を
て明徳とあらくみ。生れつきし時に玉徳なふう。

一　博文約礼　十三丁オ

何ともかく有がたく。嬉しきことにあらずまじ。いとかたじけ
悦びの志しそのふかきといふなり。されば
先生の御うけふかく。此悦びを知らせ給ひしは。
かぎりなき高恩にあらずや。独まば此度慈恩は。
虚しくならぬ中に及びながら。湯の盤の銘
のごとく苟に日に新たにして日々にあらためて時々
刻に怠らば。我本心の光と背きそせぬか。いたさぬ
まじのことにて。云はせぬかせぬもつれをも為せぬこと。
心の内に立かへりてみれば親は我身に生れつけて給はり

しに。我といふ身を出来しはせぬかと改めもてやまよ
ば平常正月元旦ぐらしといふものゝごとく。一生
氣が生心がまゝといふことなしにくらさば。誠に悦びし
うらぞや。同じ志の友かくれごとく集り多勢
つれだち。正月ぐらしは誠に楽しいうらぞや。
生まれ得しを忘れ心まかせの玉の始といつとも忘れし
悦びて本の心をゆがめじとおもふは成る家ひやはある
親へ孝おのづからばかりし楽を求めず苦とて煩じ
もそもなく始を忘れぬ本の身にあらたまるぞや始やせん

天に恥ぢ人に恥ぢバ何の玉の姿ともやいて何し

○或問、克己復礼といふハいかやうに致し候事をいふや。

我答ていふ。是学問なくてハ其耳に能聞え安きやうに俗く暁さるべし。

己礼とハ向ふ所のまゝと云。礼ハ則天理なり。天理の争まる所ハあるまじかるまなり。私のまゝとハ私なり。其私といふハ何なり。身に違ふと云。独まバ己り克んといふ名ハ譬へバ花を見て居るときハ、花を見るばかりなり。たとひ善なることなりとも、花を見るとき他の善を思ふハ忽ち己が立なり。是すなハち己なりと知るべし。其己私を改るを克と云也。改るとハ花を見るときハ花のみ。月を見るときハ月のみ。食するときハ食のみにするを云なり。さればとて念の起らぬと云ふにてハなし。花月と見るときバ其月乃縁より念ハ起れども、念々外へ流れぬを、花のときハ花のみとハ云なり。元来天理のまゝなりそこに違ふとあるまじきを違ひを改めバ元来の道なるにより、復といふのあるなり。この所を高上の事といへども、徹上徹下の事なく未熟の学

○或問人色々悪念々起る。是ハ何が根になりて。千万無量の念々と。起る事にや如何。答曰。是を何が根申す知らねど。強ていはゞ問人には答るなるまじ。知らぬものを根とやいはん。問。知らざれば根になるものハ何もあるまじ。強るに何をしてそれが根に成る事にや。答。いふも何もなきが根なり。其方ハ何をなしとなる私案が。まことに為る中思。何もなきものになるぬ也。それ故に此千万の念々起る。不審が晴

者といへども。学に志をとりのべ。ことふように疎かならぬ所なり。各力限に守るべき事なり。如此するときハ。無事有事を共にぬけめなし。無事にも内洞にして有事には人の思ひまじきと思ふ人為まじき紛せまじと。能擇む故。内を弛しめば。是亦克己復礼なり。初心には守ること不能。擇ことあられども。随分志を立。倦ことなくして進まば。人々此分限狭ハ。学べき事なり。こゝが学文の肝要なりと思ひ。兎角に退屈せずして。学ぶべき事なり。

ぬなり。何もなきが根といふハ、一度自己の本心性をよく知れバ、人を皆念は無し。此所伝授の口訣なる
故みえぐ。只ハ即学ぶ人、執着より法けバ、学ぶ人の心の病となる。然れども実言ざれバ工夫の助なし。
止ことを得ず。人ハ千万の念起る次と見よ。分別を以て覚るべし。人本心性能知れバ、迷転もなく、只一気の
動くばかりの故に無念にして、能来るに随ざる、ばかりの観念バ、一身何にも角とも思ハぬところ。鏡へ物が
触れバ、頓のさハりゆる所に触ると覚え、背へ触れバ

背が覚えん。足の指先へ触れバ、其所が覚ゆるが如し。
無念なるときハ、万物の外に我なし。万物皆我なる
中に、花とよべバ姿が覚えて、月とよべバ月が覚えて、面影と
よべバ、其姿が覚えて、火燭とよべバ火燭が覚ゆる。
如此響の物が出るなり。呼び出すとも何とも思ハぬ所へ
触るが如し。是の念の起るハ、さりける所が覚ゆるが如し。
凡人ハ、万事万物に応ぜざると念と合點してゐる
故。凡人の無念根と云ハ、万物が相なり。其儘を空と云ぞ。
まづべし、凡人ハ、生れて虚空の中に始めて生じ、虚空氏

内に成長せば。其時の念くハいろ〳〵な物がある
為こや此所を工夫せらるべし。世の人皆万物の
内に出生し万物の内に成長するゆゑに。万物
万事に心応ぜざるを言と名づけ。心応ざる故念生
名づくるなり。万物万事なき所に出生するを。其内に成長
せば。何と名づけて言ふし。何と物念とせんや。本心を
知りたる者なくて。浅くて念く皆無念ゆゑに。出しも
離れなし。此離れなきを。離れて。いよ〳〵庫の中に
千万無量の物を入置きて。内にて一人ありて。何となくを

入用の道具と。自由になるがごとし。庫とハ無我を云バ。
天地あらん限。深くも居るに譬ふバ。千万無量の物とハ。
万物万事にたとふ。庫の中に一人ありて万物万事
と自由にするとハ。一気の動くに譬ふ。如此なる故に。
無我なる時ハ。天地の間に古今あるかぎりの事ハ何でも
手に入ることなりといへバ。其まゝ一気感ぜぬ事なし。
こゝをよく〳〵工夫あるべし。
聞見物万事眼にある物ハ。一気感ぜざるハなし。何事
も皆心の思ひ。総大古今事も此に浮むぞ。

粗不審なり。是ハ如何。

答。何ほど大古の事でも書傳へ語伝へある故明なり。前に云万物萬事其中よりわかれし。其理ハ書にも留めず。学もせぬことゆゑ。心に浮むといふことなき之。工夫ある意し。右の如く虚無を得て語るといへども。此六合算用はなく。知る所もあらざ。忽此物語も云ふ居れバ。何方から湧出て盡ることなし。終に無始無終とやいはん。旅人ハ夫を唯今の此所此まが卽虚空に出生し。虚空に成長し居るなりと。

私案と離れて知ることを得るべし。まつしを私案なりしバ。虚空よりの何らしく。工夫ゝ流れいづる水此みなかみを尋ねずして源しるよしもなし善事をなすといへども善ぶ足もなしと然もたてる處にくし。

○或問世上此人我父母存生なれバ孝行をなすべきに。今ハ亡なられ故。香花を手向るまでにて孝行ハなくもなしといひて後悔する人多し。然し死ぬる父母にも孝行の志てもあることにや。

答。曾く孔子へ子路死の事を尋ねたりしに

若て曰生る父母に能事ることを知らねば死ぬる時ハ父母
に事ることハ中〳〵知らるべき事にあらず。佛もおほせけると
なり。独生ばらくと呼ぐ。知るべきことなり人の性ハ則天之
父母の性を天なり。我性も天の子ゆゑに孟子の曰尽其
心者。知其性也。知其性則知天矣と阿りて天ハ私案なき
ゆゑに死生の別もなく。混一にもあらば。生ハ生死ハ死
なり心を尽して此所を知るときハ向ふ所に疑ひなる
惻隠によってなふ計なり。父母の性も。我性も同じ事
なる故情も亦同じことなり。さればハ朋月が開と無に父母の

天に通じて惻隠が發し起んとするを我からぬる
父そのまゝ私案とハ不孝者が疑ひて未だ早さぞ今
皆押して居のごとき苦をめぐり起らぬなり。扨私欲が統で
漸に起て出るなり。終日まで寝まで万事万端私案で
いふ不孝者の裁によりてうけらるゝ事ばかりなるぞ。
此総角私案が邪魔をして父母の情によってなく
さかぬなり。此私案によってなふらびして父母に事へぬ
故生れ父母に能事へべし。死の人る父母によもよく
事へらるべし。此ごとくなるときハ存其心養其性所以

奉天也との玉ふ所ようなるべし。是ハいかなれバ存其心
といふハ私案なくして本心明らかなる鏡の如くなるを以
て養其性といふハ私案といふ私をなくし本心の邪魔をせ
ぬ故に心安穏なるといふべし。是ハ一人食しく腹に足
らぬときハ腹中性命の思ひもなきに似たる故中書とハいふ
なり。又事天といふハ性が即天なり。此其性まよはせざる
ときハ天に専ら違ひ背かぬ故に奉るといふなり。
此所ハ聖賢の地位にして及びなき所なれども是に力
を用ゆる勉強が学者のことなり。然れバ吾も学ん乃端

られぬ連なりんと。謹る志ハあれども勝ぬ弟子多く
足たぐひ内々ることとなり。世俗にいふ道風の古事此
ごとく。蛙をさへと飛るへがどこそでハ柳の枝に飛つく
なきバ吾も其如く何とぞ五分も守らバづく飛得る
しと思ひせめぐ哀しくも大服なる不孝とまづ禁止
たしと願ふにふるゝを荒かくこれ孔き。
一家業ハ先祖の家業。父母の童じ纏に大切なる。
其上父母の心より子が家業よ無精なきバ。貴賞と忘れ
得ん方に見離され先祖の家業とも減ぜれんなれバ。

子孫を流浪さすべしと深傷む事

一親類一属出入させる者或ハ先祖父母兄弟のある人親を毛
しるへの人此子孫ハ先祖の親もなく睦からバ大切なる交
さへ此代ニまでハ他人に見限らるべしと深傷む事

一利欲甚しく家居残衣類に花美を好み私よ
金銀を費捨あるひハ無理として猪手たよければ自ら
人に恵なく剝奪ものなり多くハ身を覺に記る壁
みてハ　公の御法度も背中になするを是なりと
怨傷たまふ事

一色欲と酒とハ大乱の根本なり戯るゝ色欲ハ云に
及バずたとひ夫婦の間にても己に顧て少しを
不養生あまれバ遂ニ短命ならんと哀傷ある事。

一別して病気にして貪酒をせバ食事を放埒にする
こと是まして短命ならんと哀傷み玉ふ事。

右五ヶ條ハ家を毀身を滅を大事なり故に斎年此
時性を忘るより後ハ及バざるなり。勿躰なきぬと思
へ早く志ある人ハ學問なくてもこれ等のことハ能する
人ある事太切なる義をとり。性善の端を知るべきなり。

孝行ハ得せざるとも。此五ケ條の大不孝をさへせねバ。半分の
孝ぐらゐでなく。父母を傷けまゐらせることゝ知るべし。此
事を知ぬハ。剣を以て父母の身を害するに似たりと云
て。其罪を何とかせん。此外にまづ大なる不孝多かるべ
けれども。それまでハ中〳〵行とゞかずんバ。先づ此五ケ條を心得に
立者ハ。恥しからぬ中に知て。終まどを今にかく
知らねバ。指あやまり過段の事ハ知るとも。ふかく恥ねど。
猶〻浅猿く恥しけれど。取つくろふて似つくらしう書バ。
腹の中から恥ぢやといふて。合點せぬ由也。恥かしきなり

有体の姿と書ハ。偏にしも流とおるうちなきんか
○或問。致知在格物といふ事ハいかなる事にや。
答。程子曰。物来則知起。物各付物不役其知。則意誠不動。意誠自定則心正。始学之事也とあり。是学者
乃身にとりて要の所なり。熟読して工夫に力を
用ふべし。能心易く説ある時ハ先大学の
為に致此所を和らげていはゞ。物来れバ知起とは。人々
自性を知らするハ赤子に如するにあらずや。赤子ハ我と
立る事もなく。知とする事もなし。君に向へバ君。父母

に向へバ父母。兄に向へバ兄。花に向へバ花。戸障子に向
へバ戸障子。此方より少しも用る事なし。
君父ハ君父。戸障子ハ戸障子。分まさつて有といふ人。
物各付物といふんのごとく。君父ハ君父。花ハ花。戸障子ハ
戸障子。それぐにかけまとつてあるものなれバ。何事
でも其物に拘しなすやふ随ふといふなり。不役其知といふ
私知と用ぬといふなり。私知とハ私案之。赤子にハ私案
なき也なり。何ごとも私案が出ると向ふの物に背
くなり。故に何事すすとも私案を落ハせぬかと擇ぐ

私とせぬといふなり。　則意識不動とハ右の如く私案
なき所に寧へバ出てり赤子でゐるといふその所の赤子
の純一無偽そのものとあり。然れバ此方に誠なし。誠そ
誠と云ふ様バ動くべきやうなしといふ事なり。
意識自定とハ右のごとくにしてむさと常ひ学んぐ。
どちらへかしても。どちらへやりても。私案なし。此処に
するをたるとかくいふなり。　則心正とハ右の無私案
なしに分り探せてるを是ハ明鏡の如し。物きたれバ来る
ゆく。去れバ去なくに。不迎不送無極の地よりいふ

くるをいふなり。始学之事とハ。道を学ぶそのはじめ。先此道を能く弁へ学ぶべしとなり。心正しくしてくる先次第学問の始に心得ねバならぬ事なりと。のちに示し給へり。右ハ性を知り。道を学び志ある所みな。悉く入用の事故。及ばずながら和解するなり。

○或問。曽参ある時山中へ薪をとりにゆけるの留主に。にはかにきたるよ。したしき友来りけり。是に饗応をとらせたく思へども曽参ハうちにあらねバ。もとより家まづしければ。けふハ曽参帰れかしとて。みづから指をかみけり。曽参山に

ゐたりけるが。にはかに怔忡しける程に。いそぎ家にかへりて母にとひけるに。右指をかみつるがよし。きゝて心へぬるハ不審なり。御示し給へ。答曰。善哉。此不審を明に解んと思ハヾ。先自己の本心をしるべき事なり。本心をしらざる人ハ具に解あるとき。さて合点ゆくべし。其わけハいかなれバ。人々我が本心をしるといふハ。我といふものなし。只天があるなり。それ故孔子ハ一以貫之とのたまひ。釈尊ハ天上天下唯我独尊とものたまへり。これ無ぞるとさへかやうの事に少しも疑ひハ

なることなり。古今唯一身なり。天ばかりといふハ。地といふ
もの天のうちにあるものを。此地も則天の貫く所な
れば。地則天なり。天地ハ則人の身と心とおなじく身ハ
かたち心もなく心のかたちもなし。身と心とはなれざるもの
にあらざれバ。一度思案なし此明徳となるを知る所
あるを知らぬなり。其を知らぬが天ばかりといふ所なり。
曽子ハ其知らぬ天まうせずして居るなり。猶いバ母た
心のごとく。曽子ハ身のごとし。今日雖もあれ何ぞ心に
かくのごとく為さしむ。おしも幾紀ハ。其まゝを義に佇ひ。

身が働くなり。心が親がかなしき此汚るゝのこと母がいなや。
子遠手がゆゑに或ハかなしく或ハ淋しふ文行くと知るが
と思へバ。身の足が其方へつまづく由なり。曽子此母の
指をかむ事へバ。胸よりつゝく身に障りて。母ハ用事を
いひつけかくのごとし。曽子と母と二ツなし。曽子ハ私
案なき中に天地あらん。かぎりが曽子独り身と心
ながかくのごとくなるを。聖人ハ「事親者聴於無声視於無形」
孝といふの玉へるを以て曽子敬の至極よ。如此なる
と見るべし。

又問ていふ。汝のいふごとく。天地が身ひとつに備りてあらバさぞ
あるぬべし。然れども疑はしく。曾子と母と別れて行つれ。
母の心に刻所が。曾子遠方にありとも。胸にこたへるハ信
じがたし。我がいくとも信ある母ゆゑに。相応すべし。
苦心と知らぬ所より。此心寄ハさもあるべし。然れバ汝の
言く易きやうに申して。疑ある所といひ。吐を尽し。
曾子ハ母の家に心すべし。曾子此人ハ母が家にありと知
るべし。其訳と一ツをあげていふに。曾子常に家の出て
行なるまゝバ。ゆりなる所と母へかくし置て出なひ

行なる所と違へて。家へ行ながらまし。然れバ曾子ハ
母の御心安からんやうを。何時も忘れたまハず。家にあり
ても今ハ母に何か御用ハあらずや。御きげんハ何と
あるやらんと思ひ案じまゐらせて。少しも止ことなかりき。
其家の用事ハいつとても手だしかく仕舞て。随分早く
内へ帰られし。又家にて用事の隙どる事もあるまじ。其れ
用事の外ハ。折く内へ帰りおハなすよ。此
故いつ何時なりとも。大かた母の御心の望にハ。伺ひあるべ
といふ事なし。母指をかみ給ひて。曾子胸さわぎて

遠く内へ帰りなバ。母の待居たまふ心を悦びかけたまふ事。
此心をおして知るべし。親の子を慕ふハ常なり。況や曽子ハ
ごく成る孝子。さぞ母の慕ひ思ふらんと。思ひやりて
待る指をかみたまふと。母曽子を思ひ慕ひたまふ心の切なる
といふなり。されバ母ハ大きく指をかみ遣して。居たまふ所
急し。又曽子ハ胸さわぎしたるを。母の今ハ何とかあるらん
ら何ぞ何とぞ思ひたまふらんなど。胸のいたく痛きと
さとていふなり。然れバ曽子ハ不思議に胸さわぎ遣しといふ
ものなりかくのごとく胸さわぎ間敷なきも急。曽子を

外にありとも。度々内へ帰らんと心にかけて。ひたすら度々なるを
もつていつ何時とも母の待給はず。母の心ハ今曽子
が帰れバ能がしと思ふとも。いつとも帰らずなりと。おもひまし
まする哉。我が心の中にも急しきと。彼く旨様く
孝りふかきにや学問といふハ外の事ハなし。此心を学ぶ
ぢから也。則孝行ハ万善の長なる故孝ハ仁を専とふ
るなれとも。仰ぎ玉ふ。又大学に書経を引て康誥に曰。
如保赤子。心誠求之。雖不中不遠矣。未有学養子而后
嫁者也とあるを。熟く女子の子を育るも見るべし。十七八歳の

女子ハ怯にして寝る子を亦怯なる母忽ち寝入ては雷が
傍へ落ても覚ぬ中なるが。我が子に乳をあたへんと乃ち
に。母子ともに繦褓入て在ながら。子ハ内側なる時ハ口を以て
乳をさぐり母ハ覚ぬ中なるも是をしりて乳を小児に
へあたふるなり。実に康強の人のごとく。心臓に求るの
なし。何ぞや。子ハ無心にして乳に應じ。母ハ
無心にして子ハ飢に應ず。人の元来かくのごとし。故に真実
に父母の心安からん事を求めなば。他人の力を借すとい
ふべきや。誠をせざるなり。恐るべし慎むべし。何ぞ

心臓に父母の恩心安からん事を願ひ求め。深く思ひ入て
事ふるをしらば。初て是までの不孝をやめる様にはなるべきなり。
不孝やうやく漸くして孝行に進むべし。先足よりあ
改むべきは此也と思へて。その不孝といふ我身を顧て。
知まがき是をしらば。心真実に改る事を求むる志しの
立がたきが凡人の憂なり。我が知る不孝は改て知らで又
不孝なれぬ。其大略を云のためにここに少し記し侍る。

一 家業にうとき事

一 淫乱にして所持なし。不養生なる事

一 あしき人ハ交り並ともなハず所へ行事行先々と友と共ニ面白なすべき事なり。

一 短気なる物事ニ言葉荒く度々けんくわ口論する事

一 万事偽事人ニむかひて誑す事

一 遊興衣服道具普請造作を好て益体なき事

一 かりそめにも私のために金銀銭を費す事

一 先祖代々を麁抹にし或ハ父母ニ理屈をいふ事

右の条々ハ親の所ニ於て如何やうなる事成とも急度心付て改る所なり。是不孝之大略なり。具ニ付しるせり

いましめ条々

一 家業を精ニ入油断なくして非道なる利をとらざる事

一 主君ハ別して一命をまゐらす所なり。商ひの買主是も主親之類と思ふ事

一 先祖を大切にして親類を先祖のごとく思ひ。内遠諱又ハ年々之忌日を勤る事。喪を勤るごとく所清浄にして勤る事。

一 其家ニ仕る人ハ子ども出入の者までも皆先祖代々父母の手足ごとくと思ひ。憐みて見捨ざる事

一 其外驕を退け。何事も人ニ譲りたがふべく約ハまく

起く朝ハ遅く寝ね。朝ハ父母のきげんをうかが
ひ。夜ハ寝ねて其安否を尋ね。昼ハおくて所謂
みちく苦労を人にかわりて勤め。父母の衣服を所
好まん事を思ひ。食ハ口腹に安らん事を思ひ
志を慰んるを願ひ。是大事くとして父母乃
歯に喰ん事を願ひ。勤くやまざる事。
此外其子は事をあげられど。大略を志たり。
右の意まし八孝行のしるしといふんる前に書ぬ父母
のおこれいやがりのふ事をせじにと書くれし書ぬ。

能く毎人に昼夜怠らず勤ば。おし八孝行なりつとし
ともいふべくき。君子の徳を始を踏て進まさるなり。
何程の高山にのぼるも。麓より登り初るがごとく。先
不孝とせぬが。孝行のそもの初めなりと知るべし。人と
生れながら。不孝なんといはれくハ。朽木にもや不孝と
いふべくなしといふ事なり。人の親ハ首なりし。人ぐ
なけきが。則禽獣に同じ。此所此まふて畜生と云
んこと。哀しき事ならんや。
実に知りとれハ彼などならぬりの事なども。彼人欲の

私といふ雲に蔽れてあるゆゑ。本心の善月是がためにかくれて。
照る事あたはず。それ故に我が先生是といひてみづから
家不傳の教を興し。先人々に本心を知らしめ善に
進んことを願ひ給へり。本心を知るときは我といふもの
なし。我なきときは渾然たる一理のみ。孝行の道徳といふ
内外の分を忘れてこの渾然に融和する事なり。然れば
孝行の志ある人は。迷はず本心を求め知るべし。我も
其流を汲で道を学び。又人々にも其本心を知らしめんことを
庶幾のみ。又本心の光を知りたる人は。其光に依て信を

厚くして日々に新に磨べし。連城瑣珠といへども。琢磨
ざればいかで光のあらはるべきや。是をおもひて勉るべ。
○或問。主忠信といふ事に致す事なりや。女中子どもも居
あれバわかりやすく申すべし。和解ときかすべし。
但し忠は心の實を尽すといふ。信は身に實を行ふ
といふ。主とするといふは心身のあるじとする事なり。
答。忠といふは心の實を尽すを我いふなるべし。其心の實もいふ
やうなるが實ぞと。推し極めて見るべし。此實の所は性と
知るべし。皆ひとつの所なり。それを我といふは我性を

知までハいまだ少しも実らしきものなし。其天ハ天。地ハ地。高きハ高く卑きハ卑し。人ハ人。我ハ我。有は有。なきハなし。偽するものハかりするなり。偽するを見えかくるなり。君ハ君。父母ハ父母。家来ハ家来。子ハ子なり。文書付るに及ばずかくれなし。是を誠といふ。是言を待ずかくれなくなるにあらば。いはぬ前からかくれなし。少しも味ひなし。若此所に微塵を味ひあらば。不実にたがひありと見るべし。然バ実といふ誠に背ざるの名なり。尽といふ。其知まする価をかけあなく内に

擇む事なり。其能思ひえらびたる通を。則ふ行ひ得るを信といふなり。先忠信の訳ハかくれなし。此忠信とハ人あらじとまるといふハ。行ふまる事なまれバ。此身とするその我なきを敬ひ。徳程守せずして然れバ私のつくる主となる術とかくるべし。忠信ハ右いふごとくと心得て其忠信を心も身も少しも背くゆへしと流と思ひつめて思ひ悔してをるべし。かくれなくして。勉て息ざるときハ常に忠信を主となるべしと思ひて。孟子曰。誠者天之道也。思誠者人之道也とあり。又論語季氏篇。

孔子曰。君子有九思。視思明。聴思聡。色思温。貌思
恭。言思忠。事思敬。疑思問。忿思難。見得思義と
あり。按ずるに先達とは道徳備りたるの人。
我が身勝手より。独りは聖人の教へにたがひぬるにて
付ては人欲の勝手にむかひてはせぬやうと立返り見て能く
思ひまけく。欲に様とやるべし。聴にも赤かくれごと
し。顔色も手強き事ハなすまじと思ひ色かりなし。
形をまでつくな事ハなすまじと思ひ者に。言にも
理や備やハいかぬか。人のいさみ害になることハいかぬか

と思ふ者は。何事なくも為ことあらバ。非道ハせぬか道理
をせぬかと思ふ者は。今日の中にせぬ事あらバ。不務を怠し
思ひ出して必問ふべし。若後悔事あらバ一旦の怒に身
と忘れてなすまじと思ひ。辛抱にて後と者よ。人に物を
遣るには。吝きをなさぬ。名には名まで花をのせとられ
せぬかと思ひ。能く者よ。学者をきかぬか。思ふ子名物遣
ざるなり。孟子も耳目は思はぬ由なる。外物のために蔽ひ
くらまされなり。心を能く思ふに成人の人を不覚とうしなひ
ぬと。俗もまずら。手が考ふれば所の私業とられ私のこと

なりといへども世の中は志をたつる事なきにしもと
おもふと私案と忠孝へ有ふ道るべし。これ学問の至要乃所
なり。かくのごとくして修業なくバ終に只思無邪の地
にもいたる道さへ絶までども思ひをかけらるれ。所に学
び行ねバ絶なくしておほり。論語為政篇。子曰学而不思則
罔。思而不学則殆とあるも。注に不思心に得る事なし。
道あるべきにしたがひ。己を正して志を学を好む
とのみへぞ正しき人よりうけて人事を学ぶべし。学び
不学とかくべ人欲のれに志をたつる事ある由なり。危く

して安らかねと疑ありける事なり。文衛霊公篇に子曰吾
嘗終日不食終夜不寝以思無益不如学也とあり
注にこれおもひて学びざるものくるしむ。教へるの人ある
とあるも何かとおもひて道を求る心あるとも。学び学だ
ねバ人のくるる至極の所にハ進まれぬ事なるべし。此後
各々合せ忠信と主として行ふ道を学ばずんバお
なうねしけずりと云へり。
○或問。論語雍也篇に。君子博学於文約之以礼と
朱注に約要也とあるを以て見れバ学文の事に博く

聖賢のことを見知に若ハなきことども肝要の約る
所ハ礼の道也とのみハ筆なると思へバ。強まバ今日為と
学ぶ者ハ何せず礼一ツに法ぐまるべきや。此一ツれ法ぐまる
術と究する道し。
善。吾問なり学問の所要。唯此所にあり。故に我が
石田先生ハ人に固有の性を知らしむると学問の初門とし
て今此門に入らざれバ。假令子貢の才辯ありても説き
がたき所にあらん。今汝ら幸に　先生の教諭に従ひ知性
の門に入る人なれバ。吾が志を継べし。先づ肝要の約所

とハ。約の至極なり。約の至極ハ則一なり。一ハ則天理
なり。強まバ此一に約ることなり。此一にならん
と思ハゞ。先独を慎むべし。慎独の約る所ハ内に省く
自欺ことなきまでと禁むべし。腹の内に背きぬ所あり。
それハ背きぬことなり。ことが性を知らぬ人ハ心得ざる
所なり。腹の内に背きぬ所ハ。即ち人の固有の性
なり。此性と云ふハ色もなく形もなく。声もなく臭も
なし。是を指て言べき物なし。言べき事のなければハ
何もなきやうにいへど。其用甚霊明にして本家なれど

こゝに應ぜぬことなし。又其應ずべき通じがたを背く
時ハ直に腹の内に知りて内爭なれバ。されバこそ肉眼
とやぶりなるべき無私なれバなきとも清虚なる性理の
神體甚それと應べからざるものあつく縮くなることて
我心の知るべし。此性氣と合して。全体にそひふものぞ。
本心といふなり。此心徳明潔なるその故に甚名を明徳
といふなり。皆是清浄と名づく人く自己の本心一點
の私案なきときハ。何をか穢とせんや。本心元来清浄
なり。我胸にて穢と專とん。内外六根總て清浄なる

と兒ハ本然の直なり。直とハ清浄の外。別に直あるに
あらず。然るに聖賢の學問を何ほど多く書あつて
も本心を全くさるため教にあらざるハなし。故に納
の私極ハ清浄なる本心に背ざからりし本心則天理
也。天理則禮也。されバこそ聖人納まる。礼を以くを
とへの總へ。顔子孔學も。非礼勿視非礼勿聴非礼勿
言。非礼勿動の外ハなし。今日凡人も学ぶにかかりてハ
なし。非礼ハ皆不浄なり。視聴言動に不浄なくぞ。
此外の事ハ求むべからず。されバとて聖賢の書にいはね

とふ事にハあらで。其書いふも学び用ふべし。実に
其書ハ両捨にあることを知らば。学問の至約にして
其功あるべし。凡聖賢の学問といふハ。徳君子を学ぶ
事なり。故に聖人ハ顔子の。不遷怒。不貳過以て
好学とのたまひ。又君子食無求飽。居無求安。敏於事
而慎於言。就有道而正焉。可謂好学也已ともの給
へり。此論語を看て悟るべし。聖人の学ハ。書を博
覧し。広才高才ハ両端なれば。此を以て知るべし。聖人の
門にハ。君子の名を学ぶ者を学者といふなり。故に古今

世に一文不通の学者あり。博識広才の大庸人あり。そく
ハ道にあらそ。博識書をにあらで。君子の書ハ道徳
なん為の書なるべし。実に聖人の道を守らざる人
多く書を読る人と。君子の如く思ひなされ害を
取ことあり。仮令百万巻の書を読る人なりとも聖
賢の意味を知らば。又而も悪心悪事あらば。大罪人とも
いふべし。其世の中の虎狼なり。可恐可惜。書を読
まぬ庸人ハ。人を害すること甚稀なり。読書庸人ハ
甚世人を惑乱させ。其害至らざる所なし。人く此所を

餘辞べて学者の名を泥て求めんと惑ひたまふ危
うらく

為学玉箒巻上終

日本政府圖書
内閣文庫圖書之印
国立公文書館 National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan